

ほ りよ

はだかの捕虜

来栖良夫著 久米宏一絵



ほ りよ

はだかの捕虜

来栖良夫著 久米宏一絵



913 来栖良夫

はだかの捕虜

新日本出版社 1982

190p 22cm (新日本少年少女の文学 17)

く す よ し お
来栖良夫

1916年茨城県生まれ。日本児童文学者協会理事、日本子どもを守る会副会長。著書「村いちばんのさくらの木」「くろ助」(岩崎書店)、「きのこのおどり」「おばけ雲」「光太夫オロシャばなし」「戦争と人間のいのち」(新日本出版社)、「波浮の平六」(ほるぷ出版)、「文政丹後ばなし」(偕成社) その他。

く め こういち
久米宏一

1917年東京に生まれる。「車」同人、児童出版美術家連盟所属。1976年に「やまんば」(岩崎書店)で小学館絵画賞を受賞。絵本に「出かせぎカラス」(岩崎書店)、さし絵に「宿題ひきうけ株式会社」(理論社)、「ふるさとまとめて花いちもんめ」(新日本出版社)などがある。

新日本少年少女の文学 17 はだかの捕虜

1982年8月30日 第1刷発行

著 者	来 栖 良 夫
画 家	久 米 宏 一
発行者	松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 3 - 11 - 8

発行所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話 東京 (478) 3311 振替 東京 3 - 13681

印刷・杜光舎印刷 製本・古賀製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

この本の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律に認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。あらかじめ小社に承諾をお求めください。

く
じ



オキナの木
Yume

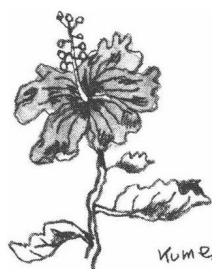
14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
貨物船……	捕虜收容所……	とりしらべの拳銃……	捕虜となる日……	アメリカ軍陣地……	夜の海からの脱出……	スパイはころせ……	壕と海への岩と……	海のみえる村……	戦場の出産祝い……	雨と砲弾……	鉄のあらし……	軍属となった中学生……	三月の沖繩……
129	117	107	98	88	79	69	60	49	39	30	23	14	5



20	19	18	17	16	15
あとがき………190	銃をうつ黒人兵………180	ハワイの空………171	声がかきこえる………163	ふたたび海へ………155	サイパン島沖で………146
					鉄の檻………137



装丁・さし絵
久米 宏
一



1
三月の沖縄 おきなわ

三月にはいると、南からふきこんでくるなまあたたかい風のために、沖縄ではぼやとしたけだるい日がつづく。

首里市真和志町の県立第一中学校のサクラの花もおわって、みどり葉が校庭いっぱいになり、枝には、あおい、ちいさい実がついた。

金城一郎がとびあがって、あおい実に手をのぼしたとき、ひとりが、

「おい、きたぞ」

と、注意をした。一郎はあわてて地べたへなげだしたスコップをとりあげた。

校舎のかどをまがっていく配属将校石原中尉の靴おとがたくひびいた。二十六歳の中尉は、ニューギニア戦線で負傷をしてからはこの配属将校となって軍事教練の指導にあたっている。ただし、いまはもっぱら防空壕ほりの指揮である。

一郎ら六人が、スコップをかついで校門をでいくと、一年生らが隊列をくみ、これもスコップをかついで坂道をのぼってくる。列の中には一郎の弟次郎もまじっていた。それをなにげなくやりすこ

してから六人は足をはやめた。

ふるいみやこの首里市は、沖縄本島のほぼ中央部の丘陵地帯にある。うつくしい首里城を中心に住宅、商店、学校などがひろがり、うつそうとした樹木におおわれている。西には海がみはらせ、那覇の港も手をのばせばときそうなどころにある。しかし沖縄県の県庁のおかれた那覇市は、昨年、つまり一九四四（昭和十九）年十月十日の米軍機の大空襲で、いまはやけ野原にかわっていた。首里城の地下三十メートルのところには大要塞がほりめぐらされ、のべ三千人がたてこめれるという。沖縄決戦をうけもつ第三十二軍司令部はここにおかれていた。いまは沖縄本島のいたるところで地下壕ほりがすすめられ、島は一大地下要塞にかわっている。

その日は米軍機の攻撃もなかった。あおい、たかい空を鳥がながれるようにして敵の偵察機がとぶだけだった。坂道をおりて道ばたの民家に、もったシャベルをたのみ、てぶらになるとことばも足もはずんだ。南へ三キロもあるくと、中頭郡真和志村国場の球一八八一部隊——第三十二野戦貨物廠事務所がある。とおりがかった兵隊が足をとめてふしぎそうに中学生らをみつめた。

「おうい、おまえら、どこへいくんだ」

兵隊がどなった。みると兵長の略章を胸につけていた。一郎は挙手の礼をした。

「原少尉どのに面会にきました。鉄血勤皇隊のものです。一中の金城です。そういつてもらえかわかります」

「なんだ、中学生か。中学生がなんの用だ」

兵長はそのまま中へはいっていった。

貨物廠事務所かもつちやうじむしょといつても民家みんかの一軒である。あかがわらの家のまわりは石をつんでかこんであつて、庭のすみにはまっかなハイビスカスの花がさいていた。左てには地下壕ちかごうの入り口が大きく口をあけていた。

「はいれ」

べつの兵隊へいたいが顔をだした。軍隊ぐんたいとは不愛想ふあいそうなところである。とりわけ兵隊などがうかつにわらい顔をみせようものなら、

「たるんできやがる」

と、たちまち上級じやうきのものにぶんなぐられる。それはわかつていたから六人はいっそう緊張きんちやうして民家へはいった。

原少尉はらしょうゐは机つゑのまえにすわっていた。一郎いちろうをみると、

「とうとうきたな」

といつて、眼鏡めがねをひからせた。まるい、はちきれそうな顔にえくぼがでた。将校しょうこうというよりは学生しやうせいのようだった。

首里市しゅりし鳥堀町とりほりちやうにある渡久山家とくやまけは、大きな造り酒屋つくざかやで、金城一郎きんじやういちろうには母かたの叔父おじにあたる。一郎兄きやう弟だいはそこからちかくの県立一中けんりついちちゆうにかよっていた。

一郎らの父と母、おさない弟と妹はフィリピンのミンダナオ島ダバオにいる。わかいときフィリピンにわたった父は、移民いみんとして成功せいこうしたひとりで、ダバオちかくの山をきりひらいて農場をもち、ア

サづくりにはげんでいた。またダバオには球陽バザーという百貨店も経営していた。しかし、子どもたちは郷里の中学でまなばせようとおもひ、一郎と次郎を叔父の渡久山家にあずけたが、太平洋戦争もひましに日本の不利になるとダバオからのたよりもとでえた。父たちはフィリピンへせめよせた米軍の攻撃をのがれ、ミンダナオ島の山中をさまよい、一家全員が飢え死ぬが、もちろん沖繩の一郎兄弟も、渡久山もそれはわからない。

造り酒屋だけに叔父の家にはいつでも米俵がつんである。ブタ、ニワトリもなん十頭、なん十羽と飼ひ、軍人のでいりもおおかつた。たべるものは不自由をきわめていたが、

「金城の家へいけばご飯がごちそうになれる」

といつて、同級生たちもあつまってきた。

原少尉とであつたのもこの家である。少尉は福岡県のうまれで、慶応大学の学生から軍人になつた人だつた。もうひとり慶応の学生から軍人になり、おなじように貨物廠へ配属になつた室井見習士官がいた。この人は茨城県の出身だつた。

一郎ら中学生もいまは学校で勉強する日はない。くる日もくる日もツルハシやシャベルをふるつて壕ほりである。それにいやけがさして、学校をずるやすみして、家で本をよんでいると、たずねてきていた原少尉が、

「ほう、なにを読んでいるんだね」

とのぞきこんだ。

「はい、島崎藤村の『夜明け前』です」

「いいものを読んでいるね。藤村は好きかい」

ほかのものは、あせをながして壕ほりをしていっているというのに……と、とがめだてもしないで、いきなり本のはなしをするわかい軍人に、まるで肉親のひとりのようなしたしきをおぼえたものである。少尉もこのときばかりは学生にもどったようだった。

「ひさしぶりだなあ。本はいいなあ」

少尉は長編小説『夜明け前』を手にとつて、ぱらぱらとページをめくつた。

「家にあつたから読んでいたんです。このあいだは倉田百三という人の『出家とその弟子』という本を読みました」

「いろいろと読んでいるんだなあ、きみは……。えらいなあ。藤村の詩もいいし、高村光太郎の詩もすきだ。ほくも『万葉集』の文庫本を一冊もつてきているが、軍隊では読んでいるひまなぞない。

そうやって本の読めるきみがうらやましいよ。金城くんは県立一中の三年生だろう」

「そうです」

「鉄血勤皇隊だな。しつかりやれよ。米軍が上陸してきたときはどこかの部隊へ配属されることになるが、いつそのこと、おれのところへこないかね。貨物廠の兵隊になったらどうだ。どこでたたかってもおんなじだぞ」

原少尉はわらいながらさそつた。

沖縄県の県立、市立、私立の中等学校十校の生徒は、三年以上のものが鉄血勤皇隊に編成され、米軍がおしよせたときは、陸軍二等兵となつて軍隊といつしよになつてたたかう。一、二年生で適性検

査に合格したものは通信隊にはいった。沖繩師範女子部をはじめ高等女学校の上級生は、それぞれ

「ひめゆり部隊」「白梅部隊」「瑞泉部隊」「積徳部隊」「梯梧部隊」などを編成して、従軍看護婦となり、野戦病院ではたらくことになっていった。——もちろん、沖繩決戦になると、これらの男女生徒のおおくが戦死した。学校の職員、配属将校らもおなじである。

首里の上空に米軍機があらわれると、兵隊らも、町の人たちも、いそいで地下壕にかくれたり、家の中へもぐりこんだりしていた。それでも死人、けが人はでていた。

「壕ほりや土はこびだけじゃつまらないなあ。ぼくは皇国臣民として死ぬ覚悟だ。そんなら第一線にでてたたかうべきじゃないか。米兵をひとりもたおさないで、空からうたれつばなしで、シャベルをふりまわして死ぬなんて、ばかくさい。——どうだ、ぼくのよくしっている原少尉の部隊へはいろうじゃないか」

一郎のさそいに同級生五人がこおどりした。

「それがいい」

これでいまずぐ軍隊にとびこもうという中学生は六人になった。

「よし、わかった。きみらを日本帝国軍人にしてやろう。しかし正式の軍人にするわけにはいかないから、貨物廠の軍属にしてやる。軍人も軍属も皇国の危機存亡のときだからおなじことだ。だが、採用するからには、それだけの資格があるかどうかをみなければならん。それではこれから試験をする」

「はい」

六人は直立不動の姿勢で声をそろえた。

原少尉は、このおもいつきにすっかり満足したふうだった。一郎らがせまい机をかこんですわると、わら半紙が一枚ずつくばられた。部屋（へや）のすみにあつた黒板をひっぱりだして少尉は問題を書いていく。数学がある。国語がある。英語がある。六人はめんくらつたが、受験（じゅけん）ともなれば白紙のままですわけにもいかず、いいかげんに数字や文字をならべることにした。

「よし、鉛筆（えんぴつ）を置いて答案（とうあん）をだせ」

原少尉のことばで受験ごっこはあつさりおわつた。少尉は六人を一列にならべて、

「気をつけえ」

と、号令（ごうれい）をかけた。

「全員合格（ぜんいんごうかく）。おまえたちをこの部隊（ぐんどう）の軍属（ぐんぞく）に採用する。米兵（べいへい）が上陸（じょうりく）してきたときは、さしちがえて死ぬことになる。それまではおまえたちのいのちはこの原少尉（げんしょうゐ）があずかつた。戸籍抄本（こきせうほん）と親権者（しんけんしや）の承諾（しょうだく）書（しよ）をもつて、あしたからきてもいいぞ。かえりは気をつけるよ。敵機（てつき）がきたらどこへでもへばりついてうごくな。うごくとならわれるぞ」

希望（きぼう）どおりになつた。一郎らははしやぎながら首里（しゅり）へひきかえしていった。

正午（しょうご）がすぎていた。日はたかい。民家（みんか）にあずけたシャベルをかついで、なにくわぬ顔で第一中学校へもどると、たちまち配属（はいじょく）将校（しょうこう）によびつけられた。だれかが一郎らの計画（けい画）をして、もらしたにちがひなかつた。玄関（げんかん）さきへ整列（せいれい）した六人のまえへ、まっくろにひやけた顔をつきだした石原中尉（いしはらちゅうゐ）は、

Yume



軍刀の柄をにぎって、いきなり、

「おまえたち、壕ほりにもでないでなにをしてきたか」

と、どなった。六人が棒だちになって口をつぐんでいると、はげしい平手うちがとんできて、金城一郎はおもわずよろめいた。ひとりひとりにゴム判でもおしつけていくような正確な平手うちがおわると、石原中尉は胸をそらした。

「鉄血勤皇隊第一中学隊の指揮はこの石原中尉があずかるとる。すでに沖繩は戦場である。戦場で指揮官の命令なしにかつてな行動をしてはならん。いいか。戦争というのは、おまえたちがかんがえているほどのん気なものではないぞ。かるはずみなことをするなよ。わかったな」

「はい、わかりました」

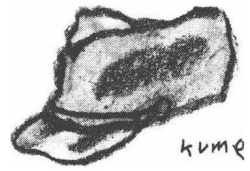
六人はいつせいに声をふりしぼった。

「わかればそれでいい。すぐ作業にしろ」

「――あの、昼飯をくってからでいいですか」

中尉はうなずいてわらった。

「腹がへつてはいくさはできぬというからなあ。そのうち飯もくえなくなるかもしれんぞ」



2 軍属となつた中学生

あくる日、はや昼飯をすませて金城一郎は叔父の家をでた。

ほかの五人の同級生は、石原中尉の注意をまもつて軍属志願をあきらめている。一郎ひとは決心をひるがえさなかつた。叔父たちも、ひごろからしたしくしている原少尉の貨物廠にはいることは、第一線におくりこまれるよりもむしろ安全だとかんがえ、必要な書類を用意してくれた。

首里の坂道をおりと、しろい道がまっすぐ南へむかつてのびている。道は森の中をぬけ、背たけよりもものびた砂糖キビ畑をぬけ、民家のちらばっているところへでた。そのとき、うしろの森の上からいきなり米軍機がとびだした。まっくろい小型の戦闘機である。その機体がおおいかぶさるように高度をさげてきた。一郎はむちゆうではしつて、民家の石垣の下へつつおした。道路の上を上げむりあげながら機銃弾がぬつていつて、爆音はとおのいた。敵機はゆっくり旋回しながら、航空母艦へひきあげていくようである。

まっ昼ま、しかもたつたひとりで空から射撃をあびることはおそろしい。一郎はからだがかくくふるえ、石垣へ手をかけてたちあがつたが、しばらく足をふみだせなかつた。民家から中年の男が顔